



生かされ、生きるチカラ。

苦を乗り越えた先に、 幸せの道標が見えた。

厚本教会 石田育代さん

石田育代さんは22歳の時、寿司店の店長と結婚。3人の子供を授かるが、毎日のように深夜に帰宅する夫といさかいが絶えずに離婚。実家に戻った傷心の育代さんに元夫の唐突な再婚と独立・開業の知らせが追い打ちをかける。憎悪が募り、卑屈感、孤独感に生きる気力が萎えていく。そんなとき、困難を抱える多くの人と出会う縁を得る。夫がギャンブルにのめり込み借金を抱える家庭、重病の子をもつ夫婦……。その人たちの話を聞き、寄り添う中で育代さんは自分の心を見つめ直す。振り返れば、元夫は家族のために働き、十分な生活費を渡してくれていた。3人の子どもたちは、実家の兄がわが子のようにかわいがってくれている。自分はたくさんのおかげさまの中で生かされている。自己中心の偏った見方から離れると、心から感謝の念がわいてきた。宝とも思える子どもたちとの暮らしがあるのも、結婚があり離婚があつて今に至ったからにほかならない。苦を乗り越えた育代さんは、「幸せの道標を見つけた」と実感している。



暑気を味わう

地球温暖化の影響でしょうか、世界各地の気温が上昇しているといわれます。日本も例外ではなく、しかも湿度が高いため、毎年、夏の暑さがつらい、身にこたえるという人も多いことでしょう。

「夏の暑さの激しいときには、煩惱の熱を離れて涼しい悟りの味わいを得たいと願うがよい」とは華嚴経の一節ですが、そう願えばたちまち涼しくなるというよりも、心のもち方一つで、たとえ同じ気温でも感じ方が変わること教えているのだと思います。

かつてある教育者が、「この酷暑が、お米をはじめたくさんの秋の実りを育ててくれる」といい、「暑い夏に感謝しよう」ともいわれました。いやだなと思うことに対して感謝する——それは、苦手なことや嫌いなものを受け入れ、味わうことです。つらいと感じることもよくよく吟味してみると、たとえば暑熱やうっとうしい雨も、私たちを育む光であり、慈雨であると気づくのです。この感謝の念が、「涼しい悟りの味わい」につながる智慧ではないでしょうか。

立正佼成会